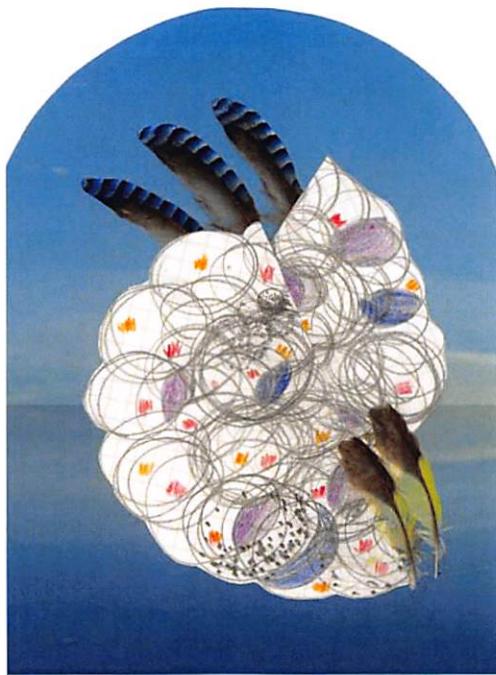


地中海

MARE MEDITERRANEUM

2022. 2



令和4年2月1日発行(毎月1回1日発行)第70巻第2号

No.765

創刊理念

文化としての地中海、そうした概念が近代思想の鄉愁として最近うかび上ってきた。それは、ローマでも、ギリシャでもなく、エジプトでもない。もっと古い発生史的なものだ。別ないかたをすれば、地中海的なクリマ、明朗で明るく、同時に人間的な感情とつよい同化力。あらゆる大陸の奥地から南下しまた北上した、すべての未開なものと同化してきた大きな力、——それをホメロス以来ピカソでも、ブラックでも、シロニーでも、みなおなじ気持であこがれる。

源泉的・精神の、本質的な方向を指向するもの、それが「地中海」である。

地 中 海

一一〇一三一年 二月号 (通巻七六五号)

◇ 今月の二十首詠 …… 甲骨骨折

白子れい 2

■ 作 品 [A]

虎谷信子・高津紗千子他

辰巳洋子他

立見千代子他

飛田久栄他

吉野ふじ子他

石塚貴美恵・岩井久美子

天野純代・柴田紀子

田土成彦

16

38

15

72

46

20

4

A C B A

■十二月号作品批評

A……木村文子・永塚節子

B……浜谷久子・島根美智子

C……横田敏子・仲西正子

○オリーブ集……牧 雄彦

オリーブ集……田土才恵

山崎昭子

19

久我田鶴子

18

◇ 今月の二人

香川進の生きものの歌

40

田土成彦

15

16

38

72

46

20

4

私と短歌との出会い (234)

藤田美智子

34

19

15

16

38

72

46

20

4

● 最近の歌誌より

[編集部]

44

■ 遊覧寄港 <徳川家康伊賀越え・南山城編>

甲田啓子

34

35

19

15

16

38

72

46

20

4

■ 歌壇月旦

職場詠から見えてくるもの

藤田美智子

34

35

19

15

16

38

72

46

20

4

◇ シルクロード・カフェ —————【責任編集】木村文子

36

クリップ …… 88

神田通信 …… 表 3

(表紙デザイン) 田中義和

甲骨骨折

白子　れい

昭和二年生まれ。
洛東グループ長。
歌集に「疏水のほとり」「箱のみち」がある。

泥沼につるりんこんと滑りたるのみに骨折おもいもよらず

八十歳の祝いと短歌仲間よりいただきし杖十年後使う

リハビリ室窓辺のベッドに仰向けば白き浮き雲話しかけくる

とりどりの機能もちたる歩行補助機日ごとにかわりリハビリ楽し
コロナ禍に面会かなわぬ日々なるも励ましの便り力となりぬ

体重の三分の一を右脚にかける練習今日も三時間

歩く稽古・医師との面接・レントゲンつきつぎありて一日過ぎゆく

眉月の傾く西空あかね雲あかあか染まり西山おおう

西空に傾く眉月くつきりと浮かべて雲はあかねに燃ゆる

喋らねば舌おとろうと竹べらで押してきたるを舌でもちあぐ

入院しはやも一か月膝骨のつながり異常あらずと ああ

病院にて迎うる吾の誕生日目出度くはなし楽しくもなし

おめでとうと弟夫婦・姪っ子がわが誕生日祝いくるるも

ギブスにて支えられいるわが脚の自由になる日まちに待つなり

ピックアップ歩行補助機に身を任せ体重かけゆく一步一步に

日に一度車椅子にて空仰ぎ外の空気を胸一杯に

青空に泛ぶ白雲形かえ姿かえゆく少し少しずつ

ひと口に青空というも頭の上は紺碧山際は淡き水色

退院の日の定まりてよろこびと一人居の不安脳裏をよぎる

歩行補助機持たのみとなして退院す一人住む身の支えとならん

作品 A

虎 谷 信 子

友 よ

・伴

女学校といふ頃より 共に学びし友よ逝きしか ああ哀しきよ
 折口信夫の門下なる師につき共に民俗をふかくたゞへし日日のありしか
 民俗のクラブ活動 歌会もあり。やさしき歌集上梓なされし
 ほろぼろと痛むや のどのホーティで、体育休む 君のおもかげ
 遥空会民俗の旅 共にいくとせ、コロコロ君の笑顔に 和む
 ヨウチャンと 呼ばるるやさしさ 面影に コロコロ笑ふ声甦る
 コロナ禍の 死者なしといふ日のあればホッと安らぐ思ひしみみに

高 尾 恭 子

追 憶

・大

ひえびえと日暮れの町は追い打ちをかけて肉じゃがの匂い立ち来ぬ
 口角をあげてマスクをはずすべし元の暮らしをもたぬ身なれど
 Facebookの幸せこゝにボチボチといいね、いいね、どうでもいいね
 どうするとあなたは問わずどうすればいいのと風の荒草に佇つ

藍色のとげ抜き地蔵の守り札かえす當てなく掌を合わせたり
 文例のとおりに書いた六枚の喪中ハガキをポストに落とす
 存在は細部にやどる十余枚のあなたのカードに鍼をいれぬ

高 津 砂 千 子

秒 針

・風

「昨夜遅くしづかに息を引きとりました」夫の昇天友は告げくる
 ただ一度の会いなりしかど友の夫 ふところふかき人と思いま
 秒針の音ひびきくる夜の更け寡婦となりたる友は寝ねしや
 実生なるいちょう黄葉の散り果ててはや固き芽を抱いているも
 しつかりとさくらもみじを踏みてゆく土になじめるもの信じたし
 ピラカンサ南天の実のたわわなるしもつきの末姉の忌のくる
 われらみな残るさくらぞしまい湯に浸り彼岸の人を偲びぬ

滝 田 靖 子

断捨離

・新

同じ樹の同じ枝に茂りるものをみちそれぞれの色に染まりぬ
 何故と思ふこともあり樹の末にいつまで残るもみち一葉
 樹には樹の人には人の命あり冬はつましく清しく生きる
 つまらない一年だつたなつまらない顔に毎日暮らしてたから
 来年は来年こそは良いことがあるはず少し笑つてみよう
 自らの身を切る選択など無くて雇用保険料値上げの決まる
 断捨離のいまだ終はらぬ霜月の結局何を断捨離したのか

竹下妙子

秋深し

・霧

玉井綾子

七色

・羊

川ひとつ越ゆる術なき対岸に見えつづる花一樹あり
鬼灯の色よりさびし心もち夜のほどろに白きざざん花

韓国を越えし朝の陽つらつらと椿の若葉光りてゐたり
川底に朽ちたる木の葉とどきゐて秋の落葉くれなるもてる

ころごろと柚子が特異の香を放つ青きとんがりの青春のこと
桜木の裸木揺らす虎落笛 里の河原で鴨と聞きをり

「ただ今」と言へば「お帰り」と言ふ吾の一人二役慣れて二十年

田土成彦

連和感

・宙

街中に残る豆腐屋に購へる木綿にかつをぶし柚子ポン酢かけ
虫の音も寂れちまつた草むらをいかなる神の過ぎてゆきしや
違和感はどこにでもあるキーボード横に置きたる孫の手なども
メモせねば忘れてしまふメモしても実りは十に一つか二つ
書きとめしわが歌くづのはかなげにとけてゆくごとし朝の光に
細き糸途切れさうでも途切れずひねくり回す今日の算段
窮すれば通じて新作歌七首雁首揃ふ締め切り日まへ

田土成彦

乗り鉄

・宙

父とゆく鉄旅キップ指先に弾けば白しその細い指
見つめいしおさなの眼捉えたるもの置き去りにいま発車する

父と子の乗り鉄の旅秋の日のひかりたっぷり浴び乗り換える
乗り換えのホームにそよろ吹く風は乗り鉄の父と子を包みおり
鉄行の時の流れをゆるとおなき乗り鉄その父と居て
かけ降りて先ずはヘッドの様子見る乗り鉄坊や悦に入るらし
鉄ちゃんと出会いし今日の懐かしさ遠きかの日の孫と重なる

街中の完全マスクに苛立ちて今年は金木犀が二度咲く
逆立ちに金の小鳥は上りゆくアスファルト色の空に向かいて
立ちはだかる輝くビルの隙に浮くかけらの空に月蝕見えず
自転車で乾いた落ち葉を踏みながらソメイヨシノの秋に追い付く
手の届きそうなところに七色を浮かべビナイサーラの滝は落つ
降り出せば道路に現る七色のあぶらにじみてプライド示す
起きぬ子の羽毛布団にうずもれて固き足裏の指色ピンク

中島央子

絵文字

・森

駅前のロータリーに立つ楠大樹雀色時いのちみなぎる
あさ朝に空をとびくる絵文字『安全確認』は孫より届く
晩年は人それぞれに孤独なりヨーガのマットに老いの横顔
思ほえず齡かさねて週一日ヨーガのマットに伸びぢぢみする
幾度もアルコール液の洗礼に吾の手のひらきしみはじめる
呼ばれたる返事をするに又呼ばる娘の耳のかぎりたるかや
茶の花の散るころとなり茶畠の根方にさす陽冷えはじめたる

中島義雄

沐浴

・岡

茫々と熱殘る草を握りしめ点滴二十日の針を抜かる
六階の窓に差し入る光淡く月齢暦一枚を剥ぐ
約しるし歌会の今日と思ひつづ塩分淡き粥を啜りぬ
寝ねしまま髪を濯ぐに任せをり朽木の如き五体を伸べて
何もかも嘘でありたし枯草の束の如き身を洗はれてゐる
男なる体の仕組みを洗ひくるる看護師はまだ未成年かも
寝てばかりゐる身を運ばれ洗はれて「お疲れさま」と勞はられたり

永塚 節子 歳月

・銀

雨上がりの秋の空はわがものと右へ左へかもめ群れ飛ぶ
霜月に聖なる夜の来たようなまつ赤なりボン心して解く
少し温きシチュー啜りつよきる景ボーランド国境極寒の森
霜月に友を送りました一人友の計届く師走に入りて
並びいるうしろの席を振り向けばそこにはいつも笑顔のありし
送ること送らることもはや無きメールアドレス生きし証しに
うから逝き友も居まさぬるさとは年々歳々遠くなりゆく

仲西正子 軽石漂着

・沖

小笠原の海底火山噴き出して軽石漂う沖縄の海
黒潮の道をたゆたい打ち寄せる軽石ひとつ掌に置く
百日を黒潮の道たゆたい打ち上げられし浜の軽石
海底の億年の夢覚めたるや軽石は浜に陽を浴びて
すさまじき軽石の波に包囲され海に出られぬ船繋がれて
砂になる日までは待てずと軽石は袋詰めされ除去されてゆく
軽石を腹いっぱいに呑み込みて海龜の子の死す画像あり

白子れい 送り火

・洛

土砂降りの雨は数日続きしもからり晴れたり明日は送り日
われ狂い天候までも狂いきて八月半ば雨降りつづく
大文字の送り火今年見るなくて縛られておりベッドの上に
窓の外雨あめ雨の降りしきる車椅子にて呆然とおり
大粒の雨が硝子に当りくる無事送り火の済みたる朝
ぎしきしとギブスはずむ右足にいまだ体重かけてはならぬと
八月の半ば雨あめ雨ばかり吾の入院悲しみいるか

ばかりょうこ こたびも試練

・鹿

この五体母より継ぎしものなれど吾はひき継きてゆくひとつだになし
たまわりし命の危機いくたひか乗り越え又もやこたびも試練
ただひとつたらちねの母に胸張りて言えるはきみの誇り継承
こと全て不器用なること今日はまた小指をざくりカボチャ切る時
朝まだき雲ひとつなきに残りたる下弦の月はうすく貼られおり
未来とうは老若わかつたず燐として輝きいるをきみは気付かず
霜月ともなればいよいよ香りたち金木犀は質のかぎりを

浜谷久子 秋の陽

・地

秋の陽の温まるころ青虫の這い出してくるキャベツの葉裏を
ひとすじの月の光に逃げる脚百足を踏んで刺されて一瞬
るこうそう嫁菜いぬたで野の百花あふれ乱れて夕風と吹く
午後雨の予報も今朝の日の光洗濯物に吸わせてしまおう
老いの影眉間に滲ませ眠る人安らかであれ明日への目覚めに
いよいよ深まるうとする老いの時代何の備えもあるわけでなく
助けられ共に生ききて五十年わが守護神の老いの著げく

浜本芙美 国蝶

・夢

国蝶のオオムラサキの幼虫を桜の枝に見し日ははるか
むかし、あなたのくれたる万華鏡今もわたしの心をしてらす
いずれ独りになると思いつる夫か何も言わずに炊事場に立つ
ここに立ち幼な日ひき寄せなかしき言の葉のみが独り歩きす
目と鼻の距離にありつつ訪えぬ近くて遠きコロナの夏の
枯れ色の銀音竹の根方には希望の二字をたたす新葉
さ庭辺につゆくさの色見えながら心は夏にとどまりていつ

檜垣美保子

落暉

・昂

藤森巳行

又従兄弟

・銀

ふいにきてさわぐ鶴の群れの声消えてたちまち風の暴り日
散り敷ける桜もみじを掃きよせて落ち葉焚かねど塚のごと盛る

高欄のかざりは黒き鷺の像挑むかたちにつばさをひろげ
西空のうつりゆくかけ指さして正体不明をたのしむ二人

十五階ガラスのビルに映りたる冬の落暉のぬらぬら赤し
鼻尖る犬の遠吠えその先の空にまたたく星ひとつあり

蕉ひとつ柚子と干し柿たんまりといいただき今宵なますに香る
芋尖る犬の遠吠えその先の空にまたたく星ひとつあり

福田康子

電気柵

・今

老い人に日傘ささげてつき添へる人のぬくみを知らざる道
ステッキカーナの唄の横にささげゆく日傘の人の歩みやさしき
エンジン音消えし秋の夜虫達と声聞き分くる刻いとしみて
手に余るピーマンほとんど種あらず人の操作に生れきし品種
集落を結ぶ林道荒れゆくを駆除けなる電気柵伸ぶ
杉榆黒く繁れる枝伸びて遠くさびしき森に鹿鳴く
分水嶺の溝みの泥を浴びゆきし足跡しるく鹿と猪

藤田美智子

米飯

・新

米飯は母のふるさとアイヌ語の意味するところ「甘い水の川」
入植せし曾祖父らの願ひこもりるむ「瑞穂」(米原)といふ字名には
北の荒れ地に挑むに似合ひぬと思ふ熊之助といふ曾祖父の名
年賀状を交はすべーパンの親族は一人となれり母逝きてのち
日の匂ひ残る蒲団に寝ぬる夜を「き人ばかり夢に出でくる
「下り坂をともに登らう」と言ふ君に白く光れる芒が靡く
青空と対峙の構へ いつさいの葉を落としたる櫻の大樹

スーパーに出かける前に確認すマスクに帽子買物袋
欠けてゆく月を並んで見上げてるスマホに撮れと孫は命令
お風呂場で考へ事が多くなり妻心配し様子を見に来る
突然の喪中はがきに驚きぬ六十三歳又従兄弟の死
上京の我に手を振り送りしは六十年前母に抱かれ
歯科医師になつて草加に開院と従兄弟からの嬉しい便り
歯の治療再従兄弟に受けに行けぬまま永久の別れになつてしまひぬ
船田清子 イイヨと鳴かぬ 天
起きよとやヒィーヒィー鳴くは鶏ならむ なぜに今年はイイヨと鳴かぬ
南天も雷のみにて枯れ朽ちぬ赤き実欲りて鳴くやヒィーヒィー
つひにして金木犀の香も立たずまして 榎いづこに香る
赤潮の発生秋に報せられ ホタテもウニも全滅なると
年末の市場の悩みよそにして我には無縁高コレステロール
魚ならぬ軽石までが列島の東岸を攻む黒潮に乗り
降りやまぬ今日の一日 明日からは節約節約心に誓ふ

牧雄彦

奥田清和先生

・大

黄に光る銀杏並木を吹く風に乗りて先生はとほくへ去りぬ
かかる日を予想はされど先生の旅立たるが今日とは知らず
五月山色づき初めてしづかとなり師のみ魂はいまいづくおはす
コロナ禍で会ふは叶はず病院に臥したまひけり訪ぶ人はなく
晩年は寂しかりけむその妻に先立たれしは半年前なり
七十余年前の小学四年生担任は師範新卒の奥田先生
七十余年の師弟の交はり浅からず先生さやうなら安らぎ給へ

松浦禎子

薬師池

・羊

旧永井家の暗がりの中うすらと仏間にここむ祈りのすがた
梅園に集うを戒むこの二年来ん春のため椅子を並べて
人を刺し死刑になりたい男あり枯れし遠田の目路のはたてに
「この子は外顔がいい」と懷よりイタチ科ベレットのベット取りだす
歩行なお不自由な人も杖をつき紅樹を挿み幸い分かつ
かいつぶりの子が池の端に頭をあぐる短き秋の日をなぐさめて
梅林の地に馴染みきてわたくしも八十をいくつ春を待つなり

松瀬トヨ子

風船

・沖

紙風船うち合うゲームリハ室に武骨な男の持てあましおり
ぼこぼこに打たれし風船の紅色が風に誘われ空へ逃げゆく
今しがた空へ逃げたる紅色が日差しに映える弓型のおび
葦の葉にすがりて羽化せし鬼蜻蜒のちをかけて広げる翼
膝の上に広げし藍のスカーフの小波立てる貧乏搖すり
猫が覗き小犬が覗き去りてゆく不安な心見透かすように
「大丈夫頑張ってみろよ」と言わるもがん張る事には体力が要る

松永智子

影

・嵐

夏くればよみがへりくる人の声はるかなりただ待つとなく待つ
わがいのち援けたまへる人らの声のみのこるしづかなる昼
わがいのち守りたまへる人らゆき声とほくなりふたたびの寂
細りゆくおのがいのちのあらがひのひとつにあらむ湿疹を搔く
夜半に覚め湿疹まみれの身を起こし聞くとなく聞くビルの間の音
守らることの幸せ思ひつさびしともいまわが影をふむ
夜のふけの甘えの心みてあればしづかなる音この間の音

三浦好博

街の灯

・銚

届き來し荷物を開けるカッターにこの深さでは人殺しだな
弥生人の我か今にし土釜にて玄米を炊き野草を食す
反撃の姿勢持ちても何もせず少數派で居る自負ばかりなり
目の見えぬ友に優しく言葉かけ偽善たつぶりマイクロアグレッション
歌会果て庭に出づればひとしきり夕日に柘榴の笑ひてゐたり
秋日和のボールウォーキングに足延ばす茶花の咲ける角も曲がりて
丘に見れば家々の明かり競ひ合ひ師走の街の灯となりて来ぬ

宮本靖彦

千里川

・凌

今冬の初鍋かきに海老つみれ豆腐白菜鍋にぶつぶつ
通勤の夜毎立ち寄りし十三うどん今自動化しキカイがさばく
右手あげ前方確認双手もてハンドルを引く秋路さはやか
半ば散りし紅葉黄葉野を染めて神の宴の陽のかげりゆく
雨上がり朝陽さし込むアスファルト家切る影の線あざらかに
千里川芒したれて映す面に絶ゆるなき水藻をゆらしゆく
薄暗き檻をせはしく歩む虎ニフレルは野性の終身牢獄

三好聖三

霜月

・伊

霜月のおわりのひと日閑々と大根を抜き小松菜を摘む
小太りの打木源助煮て食えばたちまち口にとろけ初めたり
霜月のおわりのひと日賜りしらんられ六花を齧りつつ詠む
歴史から学ぶ力の衰えてカラカラと散るさくら病葉
宗助と御米の暮らしのつましさを羨しく思う辱辱なんざいを食う
霜月のおわりのひと日裏庭は黄葉紅葉の落ち葉が積もる
しまらくは鳥雀無声の畠なか煙草を吹かす快樂にいたり

御代田澄江

宇宙飛行士

・茨

八乙女由朗

生れ月

・柴

われら皆太陽系の生物大空の晴るれば心和み喜ぶ

晩秋の降りみ降らすみ或る者は傘差し或る者は差さず街行く
コロナ第六波控へ居ること自衛為し誰も歌会に触る人無し
自肅明け友と逢ふ歌会はらかと行くりんご狩り嬉しく記す
完全なる死の世界見しとふ宇宙飛行士野口聰一氏の見し世界とは
機外の氏右手漆黒の死の世界左手は地球に繋がる光り輝く世界
人類の必要とする物全て地球にあり地球こそ眞実バラダイスなりと

茂木斌 万里一空

・埼

雲ひとつ無き秋空の広がりに万里一空の境地に仰ぐ

薦冠に「稀」といふ字の焼印に「焼稀」と呼ぶ「桜正宗」
今日ひと日喜怒哀樂の喜の日なり小春日和の低山に来て
老いの毒まはり始めし証かも喜なる山路も龜の歩みに
山みちに出会いひし父子 児は二歳「ママ病院」と言ふもいちらし
両崖山火災のあとはありながらハイクコースの復帰を喜ぶ
ああわれも筆達者なら書きたしよ一字蓮台法華經文

もとむらしげと

河口

・そ

花を浮かべ倒木流し雪を解かす川は幾つもの表情をもつ
一筋の清水が濁流となる自然ひとの叡智の及ばざるまで
河口を低く翔びいる海鳥の速度ゆるめて砂州に降りたつ
岸近く砂州に降りたる海鳥の一羽の声はかそけさを帶ぶ
遙かなる旅の終わりに辿りつきし海に放たむ水の鬱屈
海こそは時をつなぐ橋さざ波は太古の風とともに寄せ来る
朝な夕な広き河口に積もりゆく砂の如くにわが胸廻にも

山野幸司

一人居

・沖

真新し黒き靴はきいそと妻は旅する由布院の湯を
掛け流し由布の湯に垢流し不満を流し帰宅の妻は
一人居の部屋に訪れる暗闇をしとねに誘い一夜を過ごす
生卵醤油掛けご飯贅沢と子ども心を抱き食せり
一人居の時間は長くテレビ付けただ居眠りに夜更けていく
気楽ですでも張り合いのなき一人居の家はキンキン間に泣きたり
一人居の家に応える者なきか大黒柱お前も孤独

旧正の餅搗く朝を生まれしと母は言いたり何怖じるなく
二月十五日生まれしわれに具備せざる仏の智慧は重きものかな
大戦のシンガポールの陥落日わが誕生日なれば新し
老骨といえども二月は生れ月子らが騒立つ静けくあれや
あやかりて植えたる娑羅が搖るる時思いいするはあの歌集名
はたらきて家族の糧を得しのみの昭和二十年代夢に顕ちくる
いつもいつもわれは同期の馳せ遅れ寺墓三人山墓五人

山下雅子

縁

・習

頬マスクにほっとし歩む裏通りあまき香りの木犀親し

木犀の金の小花は香り立ちわれにほろほろ縁多々あり
二、三年はマスクと縁の切れぬだらう医師の言葉は消ゆることなく
マスクより笑いかける目差しにすれ違いたりあの方かしら
山椒の香を好むらし小粒なる正体いすこに枝丸坊主
断捨離せむ靴のつぶやき香川師の多度津をめぐりし四国大会
きんしゃセルめいせんはもはや古語なれどわれに灯れる昭和の縁

山 本 孟

近事身辺

・大

吉 永 惟 昭

霜月の葉書

・熊

轄重兵、奥田清和内地にて馬の世話して戦さ終はりぬ

あるだけの花に包まれ生き切つた柩のお顔昭和九十六年

「防火用水」広辞苑より除かれる戦中を知る仲間も消えゆく

N響の「フィンランディア」静かな夜祖国ちがへど心にしみる

立ち昇るコーヒーの香を命日は君の好みの器にて飲む

家事しつつ思考の回路間違へて雑念の井戸に落ち込んでしまふ

ガラス戸にうろこ雲見ゆ読み疲れ いつまで生きる 本を閉ぢたり

ガラス戸にうろこ雲見ゆ読み疲れ いつまで生きる 本を閉ぢたり

養 学 登 志 子

坪井直さん逝く

・凌

くろき銃構えておどろおどろしき魔獸なるらむぞわぞわとせり
銃を持て人間ではない目をなせるすぐわれる日にめぐり会えるや

「人間の問題なんだ核兵器」九十六歳坪井直さん逝く

お隣の柿の熟せば鳥の来て姿のいろいろ性のそれぞれ

柿の実は喰わず一途に幹巡り虫あさりいる四十雀いとし

柿喰つて種を並べることをなす鶲の遊びひたに眞面目に

お隣さん見えないことよその屋根にきちらりと並ぶ柿の種の景

横 田 敏 子 別 れ

・福

ひと月の命と告げられ二月より自宅療養に入りし妹

桜はもう観られぬものとあきらめし妹ほほ笑む満開の下

コロナにも夏の暑さも耐え抜きて日に日に体力失せゆく妹

「来週は誕生日だよ。大好きな苺のケーキでお祝いしよう」

ショートケーキの苺ひと口ゆづくりと食みてゆづくり「ありがとう」とう

誕生日まではと頑張りし妹よ 九月に生れて九月に眠る

小春日に妹の納骨済ませたり 埋え来し涙止めどなく溢る

磯 田 ひ さ 子 生 駒

・森

たましひは生駒の山に集ひるむ 進 最子 とね子 関子

こころざし高き人らの意を受ける生心歌壇 生駒に熟し

はつかなる縁のうれし会場はスカイツリーの高さと聞きて

生駒石に彫られし歌碑の並ぶ丘に地中海の面影の頬つ

書も歌も西高東低と言ひたり香川進の破顔一笑

農業を力に最子大阪の街に桃源郷を拓きぬ

母の意を継げる桃子の育てたるロメインレタス骨の太き葉

市 原 や よ ひ チャイム

・チャイム

「野菜売ってるよ」ドライブ中の子の電話青空高き日曜日なり

並びいる野菜次次名を上げて子の声電話の向こうに弾む

直壳の野菜思い描きつついつしか我も秋の日の中

空にまだ月かかる中雨戸繰る夫を透析に送り出すため

朝の陽が作る空のグラデーション演出者一人居る様にして

夫からの呼び出しチャイムに急ぎ行くべッドにやり「ただ押しただけ」

おもちゃではないと念押しして戻る厨に又も鳴り出すチャイム

梅本武義

口は健康

・羊

小野雅子

遊ける人

・羊

杖をつく三人の遅れの様子見に走り来て急かす幼児一人
杖をつく三人しばしば待たれつ里の史跡を四キロ歩く
三人にて心強しよ衰えし足に歩くも口は健康

荒れ畑の笹を搔き分け行き着けば思いし高さを越えて柿の実
冬枯れの放棄田見つふと氣付く元に戻すは燃やせば良しと
残照の里のはずれの荒れ畑の熟柿が呼びてひよどり騒ぐ
虫の音のついに絶えたり熱き湯に日を瞑り思う今日を明日を

大浪美雪

MRI

・森

新聞の文字面乱れ眼閉づ しばしの後にそつと開けみる
名を呼ぶは個人情報漏らすことか病院の中番号となる

MRI音の種類はいくつあるキツツキのやうな掘削機のやうな
われは今撫の木なるかキツツキにトララトララと脳叩かるる
トントンと頭の中を叩かれて乱れたる脳整理さるるか
手品師のMRIは鋸に刻むもわが身無事に生還

MRIに切られたる脳はピーマンかせめて真白き花咲かせたき

奥田陽子

華やぎの刻

・羊

正午の陽いま射しきたり黄葉の樹の華やき仰ぎてゆけば

やわらかき音色のごとく降りてくるちさき葉暫しゆるやかに舞い

すがすがしと人言いてゆく細路に春は堅香子の花を観たりし

穂すすきの銀の揺れいるまぶしさに転じし眼丘に遊ばす

みどりなす連なりのなか黄葉の樹のひとところ燃ゆる華やき

永遠といはあらぬと樹樹に照る陽はあかあかと林の向こう

まこと水のすくなき川ぞその名さえ空堀川というを聞きいる

菊地栄子

かりがね

・湾

新しきウールのズボンに今朝は行く冬毛にかわる獸のように
生きとし生きゆくからにいっちはおのひたに黄の菊を食む
裸木となりたる朴の枯葉乾反りて白き背を向けている
渡りきしガンの群団刈小田の広き一画黒々と占む

いくつらも家族連れなるかりがねの飛び交いせわし夕暮れの空
酔きことまだ頑是無き一人つ子ゲームの札を返すとはせず
聖護院一本が死滅瀕死二本残る八本の成長いかに

北山雪男　じつと我慢の

・伊

にこやかに口を出づればあやしくも疑似餌・撒き餌の政治屋語群
変はらねばならぬのは何 改革を二言目には叫びてゐるが
派遣切り、自殺、倒産、ホームレス 玩具のやうに明日を壊され
若者をあきらめ沼に溺れさせ無為の為政者、親方チャの国
戦前に地続きの間なほありてファッショのかをりじわり貌出す
匿名の声にて唄ふカラオケの聞き手は仔猫 じつと我慢の
飯を喰ふ まだある筈の明日のため胃の腑励まし余さずに喰ふ

木村文子

初雪

・羊

父の氣のかすかに残る一階にて本棚を見る新しい目で
すずかけの木があの辺にあったよね ここにもいよいよ父に語りぬ
毎日をそう忙しくは生きられぬ毎日眠りて夜も眠りぬ
眠りつつ過ごした今日を胸底におさめてぬるき浴槽のなか
じゅわじゅわとへたりきった泡が出てハンドソープも草臥れ果てて
冬が来るタイヤを履き替えベタベタとはりつくように札樽道行く
背と背くつけ睡る石狩の野に初雪の降りたる夜は

草刈十郎

紅葉

・世

菊の香と人形ほめる人ありてやがて自肃の顔となりゆく

寝そべつて本読む足に触れてゐる畳ひんやり冬のそこまで
両岸にあたかも呼応するがごといまを盛りの紅葉なりけり
柿食らひ鴉ら豪放轟落に大合唱すいましましかり

白壁の蔵に柿の実赤く映え絵画のごときわが故里は
ワクチンを打ちたるあとにじわじわと浸みくる不安これも秋思か

早朝の静けさ破る町内会の清掃元気な声のをちこち
夕暮れの電車の窓に張り付いて追ひかけて来る今宵の満月

國井節子　ふるさとの縁

・春

親芋にくつつきて来る子芋たち離れられないふるさとの縁
降りて止み止みては降りぬ秋の雨明日は明日の風にまかせて
春を待つ花の色香を内に秘め球根は眠る目覚め忘れず
まるまると黄色の小菊が咲きました貴方の知らぬ新しき花
蟹もよしふぐも食べたし秋深みコロナの顔色氣にはしながら
一条の光たゆたひ猿沢の池に夕雲うかべて遊べり

河野繁子　木の葉

・雁

風日の向かいの山の櫛の黄葉あおられて舞う今日の里山
木の葉散りキツネの嫁入り幾たびか過ぎて大きな虹かかる空
まぼろしの世界を歩む夕べには時計の上に箸など載せて
夕暮れて変化はじめし言葉に「電池を飲めば痛み失せん」と
たましいの底に残せるやさしさに夜中にもらす「すまんのう」
さからいて椅子など逆さまに置くひとに誰かと問えば「おこるくん」と
退院後ぼつぼつ記憶を取り戻し笑顔を見せる要介護3

近藤栄昭

街路樹

・虹

街路樹のけやきの幹は薄黄苔育ちる元朝の冷えに

夏みかん重くゆれゆれ年を越す成り行き待つか自然の落果へ
縁石の高さの景色は新しく見下ろしてゐる街の景色を
マスクして危険をはらう仕草してコロナよけるが精一杯のこと
水を掬すれば月手に光りいる簇えてゆれて新月満月
木漏れ日が幹を濡らし洗いいる樹下の落ち葉と木の子の匂い
角張った山の天辺アーチの背菜の花の土手山を支える

近藤芳仙

令和三年秋

・信

佐藤道子

・旅

・甲

敬老へ届きたる萬子福砂屋のカステラ今年孫の嫁より

一夜明けここが細張り女郎蜘蛛の糸金色に夕陽を反す

日日延びてけふは里山越えて立つ建築現場の赤き起重機

二階屋の窓に夕陽の薺紅葉

人気無き家あかるみてをり

障子際ぬくもりてそり雨後の陽に映えてまぶしきひとときを過ぎ

窓を射て入りくる光は部屋奥のわが足元の床を温める

疫病に世界がゆれて年を越しました年を越す師走ちかづく

坂上直美

都市生活者

・天

ゆらゆらと揺れるクレーン秋空に都市生活者の孤独を突き刺す

もの憂くて作り得ざればコンビニに野菜少なき弁当を買う

ひとり食むデパートの昼餉 親子連れまた夫婦などの人々の中

働きて働きて得しマンションに終のすみかとひとり住む人

触の月東の空に浮かびおりヴァランダに眺むただひとりして

冬来れば冷たきその手押し当てて我がぬくもりを求めいし君

靈前に供えし菓子のお下がりを紅茶と共にゆっくり食す

坂出裕子

すすき

・洛

銀色にゆれるすすきの穂の先をきらめきこぼる秋のしづくの

川べりの道に積まれし刈草の山ゆつたりと秋の陽を浴ぶ

マスクして川べりの道歩みつつ水に佇む鶴を羨しむ

橋の上に立ちて眺むる川底の石光りをり秋の夕陽に

川を見て山並を見て帰り来ぬ常なることにこころ安らぎ

何もかも遠く去りたる心地してコロナの日々に友を想へる

息ひそめひつそり生きてゐるやうなコロナの夜を月は輝く

篠原まり子

行く秋に

・羊

「愛した、書いた、祈った」寂聴さん熱きもの込み上げて合掌

泡立草黄花コスモス黄蝶は行く秋の色に羽根を畳みて

咲き残る白きバジルの花摘みて食べてしまった誕生日の今日

コスモスは筑後の大河に沿いて咲く仲間外れのチョコレートコスモス

婚礼と小春日和に促されブライダルベールに三つ四つの花

パンジーの花それぞれに困惑の顔が並びて行く秋惜しむ

師の言葉「悲しみは詠む」四十余年越えて今「あるがまま／スマイル」

柴田登志恵

風吹く

・天

身のめぐり黄葉しまらく舞ひ降りぬ尾根からふんはり風の吹くらし

やうやくにひと日空けゆく比良の山もみぢ霧雨ゆつくり登る

霧雨の山にたまさかうす日さし黄葉耀きしづかなりけり

中腹を下りし頃かすこし先大きましらが振り返りゆく

前をゆくましらの大きは立ち止まり彼らが結界人出づるを待つ

ドアノブに甘藷のみつつ柿ひとつ家庭菜園の便り置かれし

世を離れ十九年を介護すがたをやかな風ときを吹きぬ

鈴木結志 氷筍

・福

久我田鶴子 永遠の明日

・羊

白銀の氷筍獨立視座にあり森羅万象神おわします

三米ほどの氷筍つらなめて冬の風物氷城を生む

美化を生む寒の造形氷筍のひとため息重ねて伸びる

勤行の声も聞かれず氷筍の日も夜もあらじ寒氣に育つ

靈魂のすがたや氷筍つらなめて記憶にとどむ林立の景

如月の寒のかじかみ一様にひかりも浴びず育つ氷筍

灯あかりに目をひらきしや氷筍の言葉かけ合うごとく照り合う

閨根榮子 参道

・崎

故里の石尊講もすたれたり辻の灯籠にもう明かりなし
目覚むれば祈祷の声の聞こえきし御師の泊せし遠き日思う

氏神の参道に旗の立ち並び年末年始の仕度始まる

旗ゆれて華やかになりし参道を通りて帰るも遠廻りなり

この年の災厄いくつありしかと鎮守の森をぬけつつ思う

シモバシラまたの名前は雪寄せ草名前に魅かれ植えいつの日
この冬の寒さの予報に期待する枯茎に着く氷の華を

閨根和美 里の弥勒

・崎

魁夷の絵全山もみじのそのままに沢こえそびゆる朝光のなか
くれないの水の橋こえ巨樹に触れ里の弥勒に逢いたることし
日光の新そばいただきその店に崩れるごとくたおれたる母

専門の水橋里弥先生休日の当番医なり母は救わる

じっと聞きカルテに書き終え丁寧なひと言ここまでよく耐えたりと

自らに車椅子押し先生は「娘さんですよ」とほほえみながら
左半身まひのみならば在宅も叶うにあやうき容体と知る

退院のすがた見しよりはらはらと目守りたるも十日に足らず
郵便局市役所眼科医美容院やるべきをやり死んでしまへり
からくりの壁を反転あざやかな消えかたに泣く隙さへ与へず
食べたきを食べ、したかりしをせし日々の嬉しかりけむ数日といへ
寝台のひとりのサイズはみだして寂相の悪き遺体なりき
明日のあさ目覚めるつもり死を知らず死を知らざれば永遠の明日
ひととほり話をききし叔父の言ふこれからまだまだ辛いことあるよ

